

書評 寺尾紗穂著『南洋と私』

(リトルモア刊, 2015年, 271頁, 1800円)

福井 栄二郎*

Book Review Saho TERAO, *Nan'yo and I*
(Tokyo: Little More, 2015)

Eijiro FUKUI

大学の授業でミクロネシアのビデオを流すことがある。登場する老人はみな流暢な日本語を話すのだが、それを観た学生たちは一様に驚く。なぜ彼らが日本語を話すのかがわからないらしい。かつての中国や韓国での日本の蛮行はうっすらと知っているらしいが、彼らの関心が太平洋の島々に向けられることはほとんどない。「南洋群島」という言葉さえ、耳にしたことがない者が多い。

さて2015年に一冊の「奇妙な」本が出版された。『南洋と私』。著者は寺尾紗穂。ミュージシャンである¹。彼女も世の例に漏れず、それほど南洋に関心があったわけではなかった。しかし学生時代、旅先で読んだ中島敦の短編「マリヤン」を契機に、彼女の心は南の島々に引き寄せられることになる。いや、惹かれただけではない。「これといったあてもなく、ただ現地で老人ホームを探して日本時代の話聞きだそう、という大雑把な目論見」[50]を抱いて、彼女はサイパンに足繁く通うことに

なる²。今ではダイビングや新婚旅行のメッカとして日本人に広く知られているサイパン。その「楽園」イメージとは対照的に、その地に今も暮らす日本統治時代を知る人たち。彼女は浮足立った「楽園」には目もくれず、図書館と老人ホームを往来し、日本語話者に当時の話を聴く。それは「マリヤン」に描かれた、日本とミクロネシアの歴史の「残り香」を現代に繋留しようとする営みかもしれない。

奇しくも2015年は戦後70年という節目の年でもあった。4月には天皇后両陛下が慰問のためパラオを訪問され、また他にもいくつか太平洋に関する書籍も出版された。こうしたことも踏まえ本論では、このミュージシャン寺尾紗穂が見聞した「南洋」にささやかな解説を加え、その意義を考えてみたい。



寺尾が足跡をたどった南洋群島とは何なのか。その歴史を少し詳細に概観していこう³。

ミクロネシアは、他の太平洋の島々と比べ

*島根大学法文学部社会文化学科

¹ 寺尾はミュージシャン、エッセイストである一方、大学院時代の修士論文は書籍化されており [寺尾 2008]、アカデミズムとまったく無縁というわけではない。また路上生活者サポートの音楽イベント「りんりんふえす」を主宰したり、原発労働者に対するインタビュー集 [寺尾 2015] を刊行するなどその活動は多岐にわたる。

² 本論の引用箇所に関して、寺尾の本書のみ、ページ数だけの表記とする。

³ 本稿で概観したミクロネシアと南洋群島に関する歴史は、以下の論考を参照している [荒井 2005, 飯高 1999, 今泉 1990, 1996, 2002, 井上 2015, 印東 2005, 須藤 2000, 2005a, 2005b, 2011, 矢内原 1941]。

ると、西洋世界との接触が早かった地域でもある。例えばグアムは世界周航中のマゼランが寄港し、いち早く世界に知られるようになる。1521年、マゼランたちが海原にその島影を見つけたとき、彼らは3か月もの間新鮮な水や食糧を補給できておらず、飢餓寸前の状態であった。一行が島に近付くと、現地住民チャモロの人々がカヌーで横付けし、マゼランの船から釘や樽を運び出そうとした。これに怒ったマゼランは島民を7人殺害し、村に火を放ち、食糧や水を奪い、島を去ってしまう（さらに言えば、この諸島一帯に「ラドローネス諸島（泥棒諸島）」という不名誉な名前を一方的に与えてしまう）。この不幸な事件が、おそらく西洋人と太平洋の人々とののはじめての邂逅である。

その後、16世紀後半から盛んになるガレオン貿易（マニラとアカプルコを結ぶ）において、グアムは重要な中継地となり、早々にスペインは領有を宣言する。またキリスト教の福音を伝えるため多くの聖職者が太平洋にやってきて、カトリックへの改宗も進められた。軍隊の「支援」もあったせいか、わずか半年で7000人のチャモロが改宗したというが、他方で伝統文化を考慮しない強引なやり方は彼らの大きな反発を招き、軍事的衝突も長期間にわたって起こった。

また島民たちにとって不幸だったのは、西洋から持ち込まれた天然痘が猛威を振るったことだ。免疫を持たない彼らは、次々に命を落としてゆく。こうした戦禍と疫病の影響で、それまで5万人いたと推測されるチャモロの人口は、4000人にまで激減した。スペインは人口回復のためにフィリピン人とチャモロの混血を進めるのだが、結果として純粹のチャモロは絶えてしまったとされる。

グアムなどと比べると、他の島々は狭小で

資源に乏しかったこともあり、それほど西洋人たちにとって魅力ある土地ではなかった。だが19世紀にはいると、太平洋は捕鯨船の往来で賑やかになりはじめる。当時の捕鯨活動を克明に描写したメルヴィルの『白鯨』（1851年）は、文芸作品であると同時に生きた史料だともいえる。実際、メルヴィルは青年期に捕鯨船員だったことがあり、厳しい規律に嫌気がさしてすぐに船を下りてしまうのだが、そこも含めて実体験をもとに書かれたのが『白鯨』や『タイピー』（1846）である。

ミクロネシアに話を戻すと、こうした捕鯨船が薪水を補給するためにコスラエ（クサイ）やポーンベイ（ポナベ）に頻繁に寄港するようになった。だが船員たちは宣教師よりももっと厄介なものを島に持ち込んだ。アルコールと性病と銃である。性病は人口を減少させ、アルコールは暴力を誘発し、銃は島民同士の争いをより熾烈で残虐なものへと変化させた。島の伝統的な社会構造が大きく変容してしまったことは想像に難くない。

19世紀も半ばを過ぎると、カリフォルニアで石油が発見され、また乱獲のためクジラの数も激減することで捕鯨産業自体が衰退する。だが、鯨油の代わりに今度はコプラ（乾燥させたココヤシ）が脚光を浴びることになる。それに伴い、サモアやハワイで活動していたドイツの企業がミクロネシアのコプラに目をつけ、ヤップ島、カロリン諸島、マーシャル諸島へと進出し、影響力を増すようになる。商人たちが動く、彼らを保護し、より国益を上げるために国も動く。ビスマルク率いるドイツは、それまで一方的に自らの支配権を主張していたスペインに対し、そのやり方が国際法に準じておらず、無主地であると主張したのである。もちろんスペインは自らの主張を覆すことはない。両者の主張は平行線を

たどり、関係も悪化する一方であった。そこで1885年、ローマ法王レオ13世が仲裁に入り、この問題に妥協案を提示した。つまりカロリン諸島はスペイン領であることを承認したうえで、ドイツもミクロネシア全域において自由な経済活動を認めるというものであった。

カロリン諸島の領有権を得たスペインは、ポーンペイに政庁を置く。島の政治的有力者を村長に据えて間接統治をはじめめるのだが、住民に無賃金の強制労働を強いるなど強圧的なものでもあった。耐えかねた島民たちはスペイン人官吏や宣教師を殺害するなど幾度となく反乱を起こし、またスペインもそのたびに軍艦やマニラ兵を送りこみ鎮圧に躍りになった。

またレオ13世による裁定の翌年には、ミクロネシア進出の機会を伺っていたイギリスとドイツとの間でベルリン協約が結ばれた。それにより、ギルバート諸島をイギリス支配下に、またナウル、マーシャル諸島をドイツの支配下に置くことを相互に承認しあった。

このようにミクロネシアにおけるスペインの影響力は徐々に陰りを見せ始めていたのだが、ここで決定的な出来事が起こる。1898年の米西戦争である。アメリカとの戦いに敗れたスペインは、翌年、フィリピンとグアムをアメリカに割譲、またマリアナ諸島、カロリン諸島、マーシャル諸島をドイツに売却した。これにより、太平洋からスペインの植民地は姿を消すことになった。

1899年よりミクロネシア統治を受け継いだのがドイツであるが、スペインほどの暴政ではなかったにせよ、それはやはり強圧的な支配だったのかもしれない。ポーンペイでは経済発展を狙った大規模な土地改革が行われたが、1910年、北部ソーケスでは反乱が起こっ

た。道路工事の視察に来た総督と官吏を銃殺し、政庁の建物に火を放ったのである。翌年、征伐のために1000人以上のドイツ兵が送り込まれ、反乱を指揮した王以下13名が処刑、400人以上の住民すべてがパラオへと強制移住させられることになった。このソーケスの反乱鎮圧後もドイツは、ミクロネシアの土地改革と経済発展を粛々と断行する予定だったが、その計画は第一次世界大戦によって阻まれることになる。



第一次世界大戦が起こると日本はドイツに宣戦布告し、1914年、赤道以北ドイツ領の無血占拠に成功する。そして1919年のパリ講和会議において、ドイツが領有していた植民地は国際連盟の「委任統治領南洋群島」として日本に移譲されることになった。これにより日本は太平洋の広大な海域を支配下に置き、欧米諸国と肩を並べる「一等国」への道を歩みはじめた。事実上の植民地ではあったが、他方で南洋群島はあくまでも国際連盟から委任された地域であり、現地の土地、住民を好き勝手に扱ってよいわけではなかった。つまり、現地住民の信教の自由を認める、軍施設の建設を行わない、住民に武器・酒類を販売をしない、奴隷売買を行わないなどの取り決めがあり、また年に一度国際連盟に報告書を提出する義務が課されていた。

1922年には軍政から民政へ移管し、政府は「南洋庁」を設置する。コロールに本庁が、サイパン、パラオ、ヤップ、トラック、ポナペ、ヤルートに支庁が据えられ、統治権力が離島まで波及するような枠組みが作られた(図1)。1933年に日本は国際連盟を脱退することになるのだが、それ以降も日本の統治は続き、第二次大戦敗戦まで南洋群島は日本の支配下に置かれることになる。

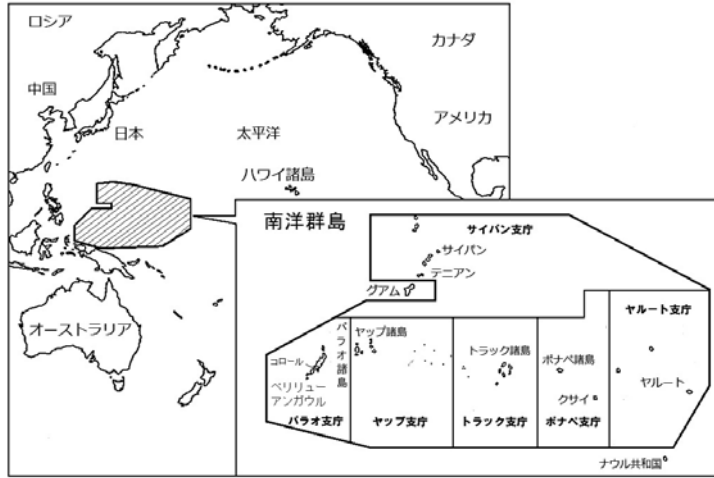


図1 南洋群島

(出典：[小林 2010：24] をもとに著者作成)

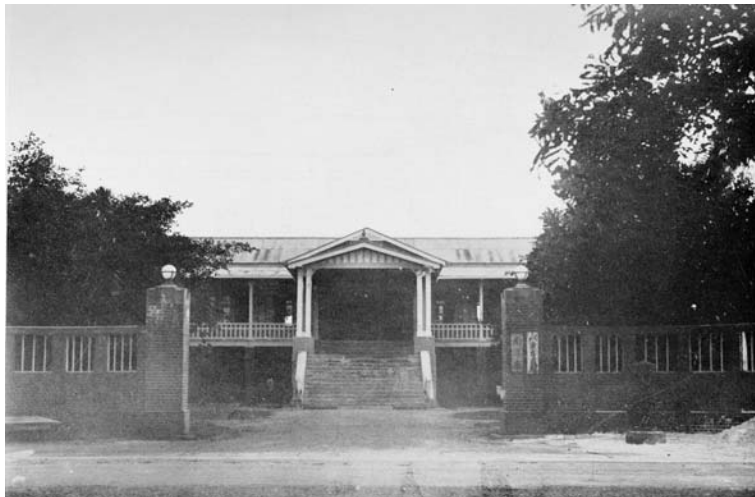


写真1 南洋庁舎

(出典：『日本統治地域 南洋群島解説写真帖』1頁より)

当初から日本が注力していたのが教育——とくに日本語教育——であり、早くも1915年には島民子弟の教育に着手している⁴。軍政下、サイパン、トラック、ヤップなどに9校の小学校（4年制）と11の分校が設立されたが、まだ教員が足らず、将校が校長、下士官

が教員を務めることもあったという。その後、1918年には「南洋群島島民学校規則」が制定され、島民子弟は「島民学校」へと通い、日本人とは違う教育を受けることになる。具体的に言えば、天皇崇拝の皇民化教育に重点を置いたものだ。1922年の南洋庁移行後は、島

⁴ 本稿で用いる「島民」とは、旧南洋群島に暮らした先住民を指し、具体的にはマリアナ諸島に居住する先住民チャモロと、それ以外のカロリン諸島民（当時は「カナカ」という蔑称が用いられた）の双方を含んでいる。

民学校は「公学校」と名称を変え（本科3年、補習科2年）、身体鍛練や徳育にも力を入れた。

日本人子弟には小学校（国民学校）のほか、1930年代以降は実業学校や高等女学校も開学したが、原則として島民子弟が通うことはできなかった。この点に関して、須藤は次のように分析する。「島の子どもたちが中・高等教育を受ける機会が日本留学以外になかった。このことから、島民への教育は同化教育に過ぎず、島の人びとに自治意識を教え、近代的な社会や政府を作り、産業を興す知識や技術を伝授することを教育目標にしたものではないことは明らかである」[須藤 2005: 79]。いや、「同化教育」と言いながら、文字通りの「同化」すらそこにはなかった。「私は立派な日本人になります」と唱和させておきながら、実際には「ガラスの天井」が彼らの立身出世を阻んだ。

先に触れた中島敦は1941年から国語教科書編修書記として南洋庁に赴任している。喘息のあった彼には転地療養という意図もあった。だが持病は快復せず、翌年3月には日本に帰国しているので、実際には8か月ほどの滞在に過ぎない。しかしその間、パラオを拠点にサイパン、トラック、クサイ、ヤルト、テニアン、ポナペ、ヤップなどを巡見している。このときの知見をもとにした作品としては短編集『南島譚』（1942年）が彼の死の直前に出

版されており、また日本で待つ妻や子どもへの手紙は——絵葉書の美しい写真と併せて——川村湊編集の書簡集で読むことができる[川村 2002]。寺尾が読んだ短編「マリアン」はこの『南島譚』に収録されたものであり、日本語堪能な現地女性マリアンと作者である「私」、そして「土俗学者H氏」の親密かつ、どこかユーモラスな関係と日常を描いた作品である⁵。

また日本政府は経済開発、拓殖事業も積極的に進める。とはいえ、もともと狭小な島々である。アンガウルで燐鉱が採掘できるのを別にすれば、土地の滋味が豊かなところではない。加えて不況の余波も受け、初期進出の産業はうまく軌道に乗らなかった。ところが1921年、台湾での製糖業で成功した松江春次が南洋に転進し、「南洋興発株式会社」を設立する。松江は沖縄からの移民を大量に採用し、サトウキビ栽培に従事させた。数年後、南洋興発の製糖業は成功を収め、経営も軌道に乗る。サイパンに酒精工場、パラオにパイナップル缶詰工場、ポーンペイに澱粉精製工場と、次々と事業を展開し、南洋興発は「北の満鉄、南の南興」と称されるほどまでに成長する。他にも、ボーキサイトや燐の発掘、海運事業、土地開発、拓殖移民、ホテル経営など展開する「南洋拓殖」、農・海産物の輸出、ココヤシ農場の経営などを行う「南洋貿易」など、南

⁵ このH氏が、中島と懇意にしていた土方久功をモデルとしているところは疑いえないのであるが、なぜか当の土方自身はそれを否定している。一方でこのマリアンにも実在のモデルがいる。上前の調査によると、それは1971年5月に亡くなったマリア・ギボンという女性である。中島の作品中には、マリアンの本名がマリアであること、姓（養父の名）がギボンであること、「東京の何処かの女学校に二三年（卒業はしなかったらしいが）いたこと」、日本語英語に堪能であること、岩波文庫の『ロティの結婚』を読むほどのインテリであること、そして「コロール島第一の名家に属することなどが示されているが、実際のマリア・ギボンもそのような女性であった。上前によるとマリアは「1972年来日中に死んだコロールの大酋長ゴリヤックルの姉」[上前 1974: 312]であり、戦後「アメリカ軍の病院に看護婦として勤めた。そして島の小学校の先生になり、死ぬまでその仕事を続けた。また晩年には地区議会の議員もしていた」[上前 1974: 313]という人物である。また2012年に調査を実施した河路は、パラオ在住のマリア・ギボンの子孫たち、そして彼女が来日の際に通学した日本三育女学校の関係者にインタビューを行い、より詳細なマリア・ギボン像を描こうとしている[河路 2014]。

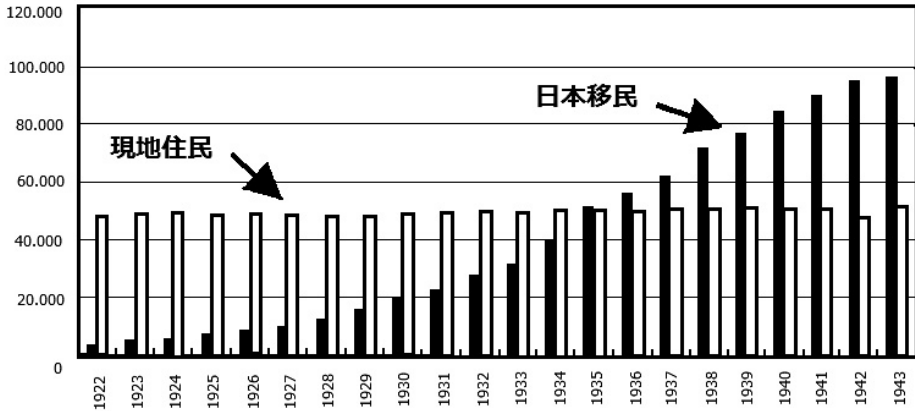


図2 島民数、移民数の推移
(出典：[荒井 2005：103] をもとに著者作成)

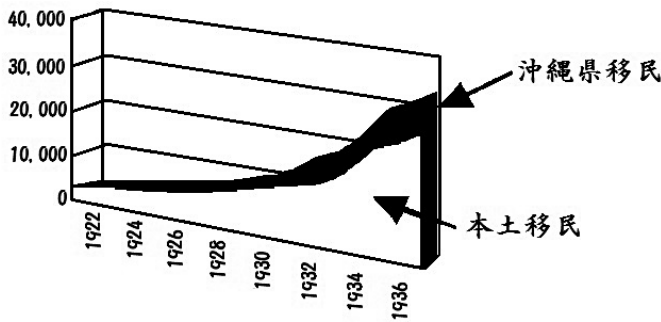


図3 本土移民数と沖縄県移民数の推移
(出典：[荒井 2005：103] をもとに著者作成)

洋行は国策会社と連携しながらその産業振興を進めてきた。

当初は赤字続きで売却論まで出ていた植民地経営であるが、1932年には南洋庁の財政は黒字に転じる⁶。景気が上向くのに伴い、日本からは多くの移民が渡南することになる。図2は南洋群島の人口推移を示したものであり、1935年を境に日本人が島民人口を上回っている。1923年の関東大震災、1927年の金融恐慌、1929年の世界恐慌、1930年の昭和恐慌と、日

本の経済は冷え切っていた時代である。遙か南洋の島々に希望を見出した者は少なくなかったに違いない。同時に、南洋群島への移住は政府としての国策でもあった。今泉が分析するように、「南洋群島への日本人移民の招致とは、統治機関の財源確保や開拓のための地場産業構築に労働力を投入することに加え、日本人勢力を扶植し、日本の支配基盤を作り出すこと、そして、日本の支配圏の最南端に経済的な南方進出のための人的資源を確保し、

⁶ 井上によると、1939年の南洋庁の収入は1000万円ほどであったが、そのうち約770万円が南興からの税金であったという [井上 2015：68-69]。

訓練すること」[今泉 2002:4]でもあった。

こうして海を渡った移民のうち、6割から7割は沖縄出身者が占めていた(図3)。当時の恐慌は沖縄の農村社会にも大きな影を落としており、農民たちは米はおろかイモさえ口にできず、野生のソテツで飢えを凌いでいたともいわれる。ソテツは毒性が強く、調理法を誤ると命さえ落とすこともあるのだが、彼らはそれを承知でソテツの幹や実を口にしていた。この「ソテツ地獄」の只中にいた沖縄の農民たちにとって、南洋への移住は、まさに地獄からの脱出でもあった。

沖縄からの移民は増加の一途を辿り、サトウキビ農園やカツオ節工場での労働力として、彼らはなくてはならない存在となった。しかしその境遇は、内地の日本人と同様ではなく、厳しい差別のなかに置かれていた。つまり「国内と同様、日本人を一等、沖縄および朝鮮出身者を二等、そして島の人々を「三等民」とみなす差別観が南洋にも持ち込まれたのである」[須藤 2011:617]。この点については後述する。

1933年に国際連盟を脱退し、1937年に日中戦争が開戦する頃から、日本は南洋群島に軍事基地の建設に着手する。1941年、真珠湾攻撃で太平洋戦争がはじまると、日本軍はすぐにグアム、ギルバート諸島、ナウルを占拠する。翌年からは南洋庁の権限も軍の指揮下に置かれ、満州からは5万人を超える陸軍兵が駐屯する。

当初こそ、日本軍はその戦線を拡大することができたが、1942年のミッドウェイ海戦とガダルカナル戦で敗れると、形勢は徐々に逆転しはじめる。アメリカ軍は、1943年11月にギルバートを、翌年にはマーシャル、トラック、サイパン、テニアンを次々と攻略、7月にはグアムを奪還する。その後も米軍は攻撃の

手を緩めず、9月にペリリューを地上戦で奪い、日本の「海の生命線」をわずか1年で突破することになる。1945年3月の硫黄島、6月の沖縄といった惨烈な地上戦を経て、太平洋戦争は事実上の終焉をむかえる。8月、広島・長崎に向けて原子爆弾を搭載したB29が飛び立ったのは、テニアンの飛行場からだった。

ドイツから無血占拠で南洋群島を入手できたのとは対照的に、米軍と日本軍の戦闘——とくにサイパン、ペリリュー、テニアンの地上戦——は凄惨を極めた。形勢不利な状況下、「米軍の捕虜になれば、男は奴隷、女は凌辱される」と教え込まれていた日本人は、軍人・民間人を問わず多くの人々が自決した。今では「バンザイ・クリフ」の名で観光地となっているサイパン北端のマッピ岬からは、老幼女子も含め1000人以上の日本人が身を投げたとされる。また手榴弾は民間人の手にも渡された。「生きて虜囚の辱めを受けず」という教えのもと、逃げ込んだ洞窟の至るところで爆発音が響いた。

この戦闘で命を落としたのは日本人とアメリカ人だけではない。島民のなかには「調査隊」「挺身隊」「義勇斬り込み隊」として日本軍に組み込まれた者がいた。食糧や水が底をつき、餓死した者がいた。日本兵にスパイ呼ばわりされ、銃で撃たれた者までいたという。島民死者数に関して須藤は「5000人を越す」[須藤 2000:336]と見積もっている。

戦後、ミクロネシアはアメリカの信託統治領となり、1980年代以降には次々と独立を果たすのだが、現在でも政治経済的にはアメリカに依存するところが大きい。



本書の構成を概観しておこう。本書は全11章からできており、高齢者へのインタビューが大半を占め、その合間に寺尾自身の考察が



写真2 南洋庁サイパン支庁
(出典：『日本統治地域 南洋群島解説写真帖』39頁より)

加えられている。考察といっても決して論理立てたものではなく、インタビューの言葉を聴いた、寺尾の心の動きといった方が正しいかもしれない。だから読者は彼女の文章を追うことで、当事者たちの声だけでなく、寺尾自身の機微にも触れることができる。また関係者から聴いた話をそのまま掲載するだけでなく、後日、彼女が図書館等で調べた情報が詳細な注釈で付されている。このあたりはもともと歴史学の徒だった彼女の資料に対する真摯さが伺える。

インタビューを実施したのはサイパン、沖繩、八丈島である。本書で出色の点ともいえるのが、当時、サイパンにあった南洋寺の住職、青柳貫孝の足跡を辿ったことだろう⁷。二度目のサイパン訪問で南洋寺の存在を知った彼女は、青柳の遺族を探するため、帰国後、ハ

ローページの「青柳」の項を上から順に辿っていく。その姿は、もはや「執念」という言葉すら浮かぶ（そして実際に遺族に辿りついてしまう）。遺族や関係者からの聞き取りで明らかになったのは、青柳貫孝という僧侶のユニークかつスケールの大きな半生である。青柳はもともと浄土宗潮泉寺の住職にして、茶道壺月遠州流の家元であり（インドでタゴールに茶道を教えた経験もある）、インド、タイ、スリランカ、マレー半島などを行脚した。南洋に転居してからはサイパン家政女学校（後のサイパン高等女学校）の設立に尽力する。戦後しばらくして八丈島に渡り、香料蒸留工場の開設・運営にも携わりながら、高校で教鞭も取っていた。また易で生計を立てていたこともある。

青柳は松江春次や森小弁⁸のように、当時の

⁷ 管見の限りでは、石上の著書に青柳に関する少しまとまった記述がある程度である。そこでは青柳の略歴と業績、そして1934年にサイパンの島民6名を引率して来日した際の座談会の様子などが書かれている [石上 1983: 62-82]。寺尾も石上の著書を参照している。

⁸ 森小弁（1869-1945）は高知出身の実業家。1892年より長くトラックに暮らす。『冒険ダン吉』のモデルであるとも言われる。



写真3 サイパン島北ガラパン2丁目通り
(出典：『日本統治地域 南洋群島解説写真帖』53頁より)

南洋群島の著名人として必ずしも名が挙がる人物ではない。けれども、激動の歴史に翻弄されながらも力強く生きてきたのは、決して名のある人物だけではない。寺尾の筆はこの一僧侶の人生に丹念に寄り添う。彼が日本人／島民、あるいは男児／女児の分け隔てなく教育熱心だったこと。日本軍の伝令として働いていた最愛の娘を戦火のなか失ってしまうこと。そうしたエピソードをひとつひとつ積み上げることで、当時の南洋群島と現在が架橋されてゆく。

この寺尾の姿勢は他のインタビューにも共通していることだ。たしかに本書に登場する人物の数は、それほど多いわけではない。しかし、寺尾は関係者ひとりひとりの声に真正面から対峙する。実際に当時の南洋群島を生きた者だけではなく、遺族、図書館の研究員、あるいは彼女を口説いてくるサイパンの

若者の言葉までが断片となって、彼女のなかに「南洋」を作り上げる。いや、「言葉」を持つのは生者だけではない。サイパン戦では、日本人、アメリカ人、現地人を問わず、多数の命が無残に散った。「彼らの苦境と犠牲は、永遠に記憶されるでしょう」と刻まれたアメリカン・メモリアル・パーク⁹の追悼記念碑の前に立つとき、亡くなった娘のために青柳があげる吊いの経に落涙するとき、死者たちの声もまた寺尾の胸を静かに打つ。

登場人物が魅力的であることが秀逸なルポルタージュの条件であるならば、本書はまさにその条件を満たしているといえる。



寺尾の聞き取り調査の出発点は、日本人の持つ「ミクロネシアの人は親日的」というイメージであった。

⁹ American Memorial Park は、サイパン島西部ガラパンの中心部にある公園。サイパン戦で命を落としたアメリカ人と島民たちの追悼施設として、米軍のサイパン侵攻 50 周年にあたる 1994 年に作られた。Marianas Memorial と題されたモニュメントには、島民犠牲者の名がひとりひとり刻まれている。

学校を作り、「土人」にも教育を施した。親日的と言われる「旧南洋群島」の人々の多くが日本統治を評価するのもこの点である。しかし、その親日的、という言葉に私はなんとなくひっかかるのだった。この言葉に言及する日本人のなかには、あの戦争を肯定したり、日本の統治がどれだけ現地に恩恵を与えたかということを強調する人が少なからずいた。また、そんなことは意識せずに、自明のこのように、ブログに書く若いダイバーもいた。支配をした割に日本人が嫌な思いをせず過ごせる場所、といった感覚で書いている観光客もいた。そのどれもが私にとってはひっかかった。南洋群島は親日的。それは本当だろうか。南洋群島は親日的。そう日本人が口にする時にすっぱりと抜け落ちるものがあると思った。かつて「土人」であった人の言葉、あるいは言葉にできずに心に積もった澱のようなもの」[23-24]

たしかにそうかもしれない。現在では「日本の植民地政策はよい成果を残したのだ」という点だけを主張したいがために、都合のよい史料だけを掲げ、歪曲した歴史を語る書籍も少なからず存在する。だがこうした論ずるに値しない「歴史修正本」は、その偏向ゆえ内容が稚拙で、まだ見分けが付きやすい。他方で、研究書の体をなしたもののなかにもこうしたミクロネシアの親日感情をそのまま強調するものが散見できる。本書と同じ2015年に出版された荒井利子の『日本を愛した植民地』はまさにそうした類の書籍かもしれない。

荒井の本に通底しているのは、当時、日本人と島民が協調しつつ暮らしていた牧歌的な

光景である。「その頃、島の道路は舗装され、学校、映画館、ホテルなどの近代的なビルが建ち並び、多くの日本人が現地の人々と溶け合い仲良く暮らしていた」[荒井 2015: 9]。「(多くの植民地政策は反発を招くものであるが) ミクロネシアでは、抵抗どころか現地住民たちは日本人と仲良く暮らしていた。そして戦後も日本人の友達や、先生たちとの交流が続き、お互い訪問し合ったりしている。日本統治時代を経験したほとんどのミクロネシア人は、戦後何度も日本に遊びに行っているし、60年(ママ) たっても同窓会が行われ、昔話に花を咲かせている」[荒井 2015: 22]。

荒井の本にはパラオ在住の高齢者のインタビューが多く掲載されていて、その誰もが「日本時代はよかった」と語る。たしかにスペイン、ドイツ時代と比較すると暴力的な衝突は少なかった。南洋庁は教育にも経済発展にも公衆衛生にも力を注いだ。そこから判断すると、親日的な語りが出てきても決して不思議なことではない。しかし、旧植民地の人々が旧宗主国に親和的感情を持つことと、植民地を批判的に考察することは別問題なのではないか。島民の「日本時代はよかった」という言説は、突然異文化に押しかけ、日本語を教え込み、神社に参拝させ、毎朝皇居の方角に向かって「私たちは天皇の赤子であります。私は立派な日本人になります」と唱和させることの延長線上にある「効果」に過ぎないのではないか。

たしかに寺尾のインタビューでも「日本時代はよかった」と回顧する者はいる。例えば70歳のフランシスコさんはこう語る。「当時は25銭あれば一家5、6人の昼食、魚とコメはまかなえた。今ではチューインガム一つしか買えない。あの時はよかった。日本のお店もとてもいい。一銭でも五銭でもおとしていくな

らとても丁寧」[59]。しかし寺尾はこの懐古の情を鵜呑みにすることなく、その背後にある複雑な感情を読み解く。「過去は美化されやすい。現在が悪ければなおさら。日本人は礼儀正しくて、日本時代は生活もしやすく、その結果、南洋群島は親日的。もちろんその通りかもしれない。けれど、もしも、とってしまう。もしもサイパンが日本の敗戦後そのまま独立してチャモロとカロリニアン¹⁰の国になってアメリカ統治を経験しなかったら、フランスコさんはこれほどまでに日本の統治時代に未練を持っただろうか」[59]。

親日的な語りばかり着目し、ともすれば植民地主義すら肯定してしまうような声にわかに大きくなりつつある昨今だからこそ、寺尾の抱いた異和感は重要である。巷間に流布した言説を妄信しないその批判的な姿勢は十分に学問的であり、それを自分の目と足で確かめようとする態度は人類学的ですらある。

先述のとおり、荒井は現在においても島民と日本人が交流を行っていることを親日の証左として挙げている。肉親や近親、あるいは戦前からの知己を頼っての交流は、個人／団体を問わず、現在でも続いている。凄惨な戦争を経験し、今では互いにまったく別の国に分かれてしまったが、それでも私的／公的に親交を温め合おうという心情があることを否定はしない。けれどもそれを一足飛びに親日的な感情に結び付けてもよいのだろうか。

この点に関して飯高は、パラオの「混血」の人たちが結成したアソシエーションを対象に聞き取り調査を行い、興味深い考察を行っ

ている。南洋群島の「混血児¹⁰」は多くの場合、日本人男性と島民女性との間にできた非嫡出の子どもであった。一般的なケースを言えば、彼らは日本国籍を持たず、母親に養育され、幼少期は公学校に通った。また彼らの父親は、戦後、単身で日本に引き揚げた¹¹。

そのような状況下、1960年代より日本の慰霊団の受け入れをスムーズにするため、現地に混血児を中心としたアソシエーションが結成されるようになる¹²。飯高が調査したパラオ・サクラ会もそのようなアソシエーションのひとつである。飯高によれば、この会の設立目的は「第一に日本からの慰霊団を受け入れ体制を整えること、第二に日本にいないはずの混血児の肉親を探すこと、第三に混血児同士で相互扶助をおこなうこと」[飯高 2009: 9] だという。実際、こうした活動を積極的に進め、日本との連携も深めてきた。慰霊団がパラオを訪れるときには、渡航手続きや宿泊施設の手配に奔走した。コロールやアンガウル、ペリリューに慰霊碑建立の計画が持ち上がった際には、土地用益の諸手続きに尽力した。こうした活動を続けるなかで、彼らが親日的だという言説が日本人の間で流布するようになる。だが飯高によれば、「慰霊団の受け入れは、混血児の持つ出自や親日感情からではなく、肉親捜しや相互扶助など混血児側の現実的な必要性との符合から行われた」[飯高 2009: 16] のだという。実際、飯高がインタビューした混血児のなかには、父親との縁がすでに断絶しており、日本名(父の苗字)を使いたがらない者もいる。また、そもそもこう

¹⁰ 現地では「ハーフ (half)」といった英語を用いるほか、「アイノコ (合いの子)」「ニセイ (二世)」「ニックイ (日系)」という日本語由来の単語も借用されているという [飯高 2009: 2]。

¹¹ 他方で、日本の戸籍に入った者のなかには、日本人子弟の学校に通い、戦後は父らとともにそれまで見たこともない「祖国」に引き揚げた者もいる。

¹² 会のメンバーシップは比較的緩やかで、混血児であっても入会しない者がいる一方で、趣旨に賛同さえすれば非混血のパラオ人や、現地滞在の日本人も入会できる [飯高 2009: 10]。

したアソシエーションに入会しながら混血児も多数いる。そう考えれば、パラオと日本を架橋する活動も、親日的という感情のみが推進力だと考えるのは一面的に過ぎる。そうではなく、より実際的な要因に着目すべきだという飯高の主張には首肯すべき点が多い。



南洋群島では島民たちの置かれた環境も、日本人たちの境遇も、決して一様ではなかった。寺尾のインタビューでは、当時、明確な階層とそれに伴う差別が存在していたことが示されている。つまり先述した「大和（日本内地）人、沖繩人、朝鮮人、島民」[35]という序列である¹³。

この点に関して、例えば中島敦の書簡では、現地の風土や気候についてや、彼自身の反官僚主義的な想いまでは詳しく綴られているものの、現地社会にあったはずの差別構造などは書かれていない。実際、彼の書簡に登場するのは、役人と教師とエリートばかりである。商人も漁師も農民も、ほとんど登場しない。これは彼自身の身分とその交流範囲が「上層」だったことに起因するのかもしれない¹⁴。

一方、荒井のインタビューの中には「差別はなかった」という語りが散見できる。例えば学校教育に関して父親が校長をしていたという日本人は次のように語る。「親父からは、島民の子どもたちと私たち日本人と差別はつけないようにと、非常に厳しく注意されました。だからうちのお袋は、僕も僕の友達も同じように扱っていました」[荒井 2015:132]。あるいは、父親が日本人、母親がパラオ人だという人物はこう述べる。「市場へ（農作物

を）持って行くと、八百屋がありました。そこでお金に換えました。日本人も沖繩の人も朝鮮の人も、同じように話していました。同じように扱っていました。島民も同じでした。私は差別はなかったと思います。沖繩の人も朝鮮の人もです」[荒井 2015:121]。

こうした語りを踏まえながらも、荒井自身は現地社会に身分による差別があったことは認めている。しかし彼女はそれでもなお、現地社会の構造を次のように要約してしまう。「これらの話から、現地では日本人、沖繩県人、朝鮮人と、それにパラオ人も皆仕事や生活は違っても、仲良く暮らしていた様子がうかがえる」[荒井 2015:124]。しかし、賃金や学歴で島民たちに「ガラスの天井」があったことは、もはや多くの資料が示している。例えば「アンガウルのリン鉱石採掘の一日の賃金は、日本人4円、沖繩人2.75円、島民75銭であった」[須藤 2011:617]し、月平均の給与は日本人が87.29円なのに対し、沖繩人は64.01円に過ぎなかった[矢内原 1941:115]。こうした差別に目を向けず、「皆仕事や生活は違っても、仲良く暮らしていた」という言葉に収斂させてしまうと、日本の支配階層が作り上げてきた複雑な社会構造が見えてこない。

さらに言えば、荒井は現存するパラオ人の親日感情がこの差別構造にあると結論付ける。つまり、日本人社会のなかで沖繩出身者は下層に位置付けられていたが、その下層性ゆえにパラオの人々は沖繩の人に親近感を抱いていた。いや親近感だけでなく、優越感さえ持っていたと荒井は言う。パラオ人は同化政策の中で「日本人になれ」と繰り返し教育されて

¹³ 同様に、「一等国民日本人、二等国民沖繩人、三等国民豚・カナカ・チャモロ、四等国民朝鮮人」[35]という当時の替え歌の歌詞も掲載している。

¹⁴ 例えば、妻に宛てた書簡のなかで、自らの身分に関して「来て見ると、地方課の中では、課長の次に、僕がサラリーを多く取つてるんだとさ」[川村（編） 2002:190]という箇所がある。

きたが、その「日本人」とはあくまでも「内地人」であって、「沖縄人」ではなかった。「つまり、「自分は本土の日本人に非常に近い」「沖縄県移民よりももっと日本人に近い」と思うことができた。彼らは自分たちを本土の日本人よりも下ではあるが、沖縄県移民よりは上。上と下のランクの中間、本土移民と沖縄県移民の中間的立場と感じていたのではないだろうか。異なる出身地のグループが存在していたことによって、パラオ人は自分たちが統治され、差別されているとしても、底辺ではないと思うことができたのだ。統治されてはいても、一番下ではない。そういう意識があれば、プライドも保たれ、差別されているという意識も薄れる」[荒井 2015：209]。

平たく言えば、この沖縄出身者に対する優越感——あるいは同じ被差別者だという親近感——があるから、現在もパラオの人々は親日的だというのが荒井の見立てである。論理が飛躍しすぎている点はひとまず置いておくとしても、もしそうであるなら、現在のパラオ人が抱くのは「親日的」ではなく、「親沖縄的」感情であるはずだ。また「パラオ人は日本人に帰化できず、沖縄県移民には許されている高等教育は認められず、飲酒も許されず、また同じ職種でも（沖縄県移民より）給料が安いし、地位も低いという差別を受け」[荒井 2005：113] ていたのなら、むしろパラオ人は沖縄出身者に対して反感を持つはずだと考えるのが普通だろう。だがその点に関して荒井の言及はない。



そもそも荒井がこうした結論に至った背景には、次のようなパラオ人の語りがある。

「日本人とは、一緒に話したり、何かしたりすることができました。上のランク（役人など内地出身者）ではなくて、下のランクの人

（沖縄出身者）です。仲良くできたこと。学校も別々だったし、差別もあったけど、一緒に交わることが出来たから、友達になれたから、昔はよかったと思っている人が多いと思います」[荒井 2015：204]。

「私は一軒の家で沖縄の人と一緒に住んでいました。パラオの人と沖縄の人はとても仲良くしていました。日本人というより沖縄の人の方がよかったです。隣どうしで、沖縄の人は豚が入るとくれた。私たちが何かいい果物とか入ったらあげた。このコロールではだいたいそうになっています」[荒井 2015：205]。

「私より年上のパラオ人たちは、日本人でも下のランクの人たちとは友達になって仲良くしていました。彼らは友達です。一緒にお酒を飲んでいました。禁止はされていましたが、隠れて飲んでいました。パラオの人が日本人のうちへ新鮮なお魚を持って行って、刺身を食べながらお酒を飲んでいました。でも、これは沖縄の日本人でした」[荒井 2015：206]。

他方、寺尾のインタビューでも「差別はなかった」[85]と語る者はいる。沖縄出身者と同じ職場で働いた者もいる [91-92]。だから、内地出身者、沖縄出身者、島民が親しく交流していた場面も数多くあったのだろうし、島民たちが日本人に親密な感情を抱くこともあるのだろう。だが寺尾はそれを荒井のようにシステム（差別構造）の結果だとは考えない。

寺尾の理路がわかるように、彼女のインタビューを少し詳細に検討しよう。1923年生まれのパラオさんは寺尾のインタビューを受けた当時、82歳だった。公学校に通ったが、その優秀さゆえ卒業を待たず、1934年に日本の小学校に留学することになる。約5年を日本で過ごしサイパンに戻ったパラオさんは、特例としてサイパンの高等小学校に入り、そ

の後も実業学校へと進学した¹⁵。そこでも優秀な成績を修めるのであるが、卒業を目前にして、差別の壁が、突如ブランコさんの前に立ち塞がることになる。

「僕はいつも5番のなかに入っていた。いつも負けなかった。自分は優秀だと思っていた。ところが卒業前に吉田先生が来た。…お詫びしに来ました。残念で。実業学校のPTAが、島民が優等生になって卒業するということに対してとても反感を持つということに来た」[156]。「卒業後、軍事部で仕事をしたかった」というブランコさんの願いは叶わず、結局、南洋興発に就職する。その後の南興では日本人社員たちに「かわいがってもらって」、よい関係が築けたというのがブランコさんの感想だ。戦後も彼ら日本人との交流は続いた。寺尾はここで次のように分析する。「社会にどれだけ差別構造が隠されていたとしても、いつでも人と人、個人と個人のつながりはそれを超えて温かなものになり得る。頭を下げてPTAの意向を伝えに来た吉田先生との関係しかり、ブランコさんの同僚や上司としてつきあった興発の社員との関係しかりだ」[157]。

寺尾はここで、まさに文化人類学の「伝家の宝刀」ともいえる「顔の見える関係性」について言及している。歴史を論じる者は、往々にして過去に存在した「システム」を再構築しようとする。そしてある現象をそのシステムの結果として論じようとする。もちろんそれによって明らかになることもあるのだろう。けれども他方で、システムには還元されない別の位相があるのだ。日々の生活における顔の見える関係とはまさにそれであり、寺尾の分析は私たちにそのことを再度、教えてくれている。

ところが不幸なことに、ブランコさんの前には、再び日本が作り出したシステムが頭をもたげることになる。太平洋戦争の激化がそれを顕在化させる。

「戦争の時、(島民に)サイパンの家出て行って、そんなことまでやったんだ、日本人は。われわれは戦後にクレームしたが、私たちが出したのは日本の金、アメリカが1975年に当時のレートで払った。だまされたよ、われわれは。アメリカと日本が戦争して家壊したりしてわれわれを人形みたいに弄んだ。辛かったよ、涙が出るよ。本当に日本によく見ってもらったけど、ほかの人々は可哀想だよ。勝手に日本とアメリカが入ってきてね。壊しておいて、知らないよ。それは日本の罪だ、それはアメリカの罪だ。犠牲になったのはわれわれ。辛いよ」[158]。

1944年6月11日、サイパンでは戦火がますます激化するなか、ブランコさんは姉とバナデルの洞窟に隠れていた。洞窟には同じように南洋興発の日本人上司がおり、別の場所に姉の夫のカマッチョさんがいるので、そちらに行けと言われる。「缶詰とかつめて(夜の)8時頃出た。カマッチョさんいた洞穴、いったら日本の兵隊ばかり、私日本語ができて良かった。そうでなければ殺されていた。カマッチョさんを捜しているいたら「そんな者いない! 帰れ!」といわれた。カマッチョさんも追いつけなかったら」[219]。

どれだけ顔の見える関係のなかで良好な人間関係を構築したとしても、戦争という非常事態のもと、見知らぬ日本兵にそれは通用しない。彼らにとって、ブランコさんは最下層の「島民」でしかなかった。

多くの島民が命を落としたなか、今、イン

¹⁵ 実業学校ではパラオ語の氏名が使用できず、ブランコさんは「神山精一」という日本名を用いた [寺尾 2015: 146]。

デビューが可能なのは、幸運にもその戦禍を何とか潜り抜け、生きながらえてきた人たちである。その個人史を紐解くと、植民地支配と戦争という歴史のなかで、禍福が複雑にあざなわれていることがわかる。彼らに教育を与えたのも日本人なら、銃を突きつけたのも日本人である。その現実を前にして、どうして「パラオ人は親日的」と一面的、楽天的に言えるのだろうか。



最後に、寺尾の本書が私たちに示したもの、問うたものを考えてみたい。

「日本統治時代はよかった」と述懐する者がおり、違う思い出を語る者がいる。「差別はなかった」と断言する者がおり、違う認識を示す者がいる。楽しかったという声、辛かったという声、懐かしいという声、思い出したくないという声。さまざまな思いが輻輳している。寺尾は言う。「南洋群島は親日的」。日本に溢れていた大雑把であまりにも一面的な物言いが、やはり現地では通用しないのではないか。人の数だけ思いがある。その思いも決してひとつの原色ではなく、一言では表現できない繊細な色合いだったりするのだ [71]。

そこにモノフォニックな「歴史」を描くことができず、言うまでもないが、むしろポリフォニックな「歴史」さえ、私たちは放棄しなくてはいけないのかもしれない。記憶の断片は、いくら寄せ集めても、大きな「歴史」になることはない。

本書と同じ2015年に、寺尾はミュージシャンとしてアルバム『楯円の夢』をリリースする。この「楯円」というモチーフは、花田清輝が1943年に著した「楯円幻想」というヴィ

ヨンについてのエッセイから着想を得ている。そのなかで花田は、焦点がふたつある楯円を、矛盾や対立や曖昧さを内包したまま存在するものとして描いているのだが [花田 1994 (1943)]、寺尾はそれを援用しつつ、楯円を唯一の「真実」や「正義」を否定するものとして位置付ける¹⁶。つまり「正しさ」は決してひとつではない。ある個人の思いに限っても、それは一様ではない。本書で放たれた彼女のメッセージは、「楯円」というモチーフに託されて、彼女の奏でる音楽にも通底している。

私の話を聞きたいの
ほんとはどちらか聞きたいの
どちらもほんとのことなんだ
そんな曖昧を生きてきた

明るい道と暗い道
おんなじひとつの道だった
あなたが教えてくれたんだ
そんな曖昧がすべてだと

明るい道と暗い道
狭間の小道を進むんだ
あなたが教えてくれたのは
楯円の夜の美しさ

「楯円の夢」より

寺尾は本書の「あとがき」において、「歴史家の見方を当時の人々に押し付けるのではなく、彼らに語らせることだ」というシルリ・ギルバートの言葉を援用しつつ、次のように述べる。「証言者がいなくなりつつある現在、重要なのはひたすら生きてきた声を拾い続けるこ

¹⁶ 寺尾へのインタビュー記事から、その語に込められた意味を読み取ることが出来る。例えば「楯円の夢をうたいましよう——寺尾紗穂インタビュー」(<http://www.ele-king.net/interviews/004363/index.php> (2015年12月24日閲覧))など。

と、そこから歴史的な空間をたちあげてみる
ことだ」[263]。

正しい解釈、一枚岩の歴史、唯一の真実。
それらを捨象してもなお、彼らの記憶と言葉
に耳を傾け、掬い上げる作業が必要だ。昨今、
歴史認識の問題が取り沙汰され、私たちは現
代史をどのように扱えばよいのか、その再考
に迫られている。寺尾の著した本書は、そう
した新しい歴史を再創造／再想像する出発点
へと私たちを導いてくれる。

【参考文献】

- 荒井利子 (2005) 「日本統治時代からパラオ諸
島に残る親日感情をめぐる——沖縄県
移民の果たした役割」『移民研究年報』1:
99-117。
- 荒井利子 (2015) 『日本を愛した植民地——南
洋パラオの真実』新潮社。
- 花田清輝 (1994 (1943)) 「楢岡幻想——ヴィヨ
ン」池内紀編『花田清輝——楢岡幻想 (日
本幻想文学全集 29)』、pp. 48-57、国書刊
行会。
- 飯高伸五 (1999) 「日本統治下マリアナ諸島に
おける製糖業の展開——南洋興発株式会
社の沖縄県人労働移民導入と現地社会の
変容」『史学』69(1): 107-140。
- 飯高伸五 (2009) 「旧南洋諸島における混血児
のアソシエーション——パラオ・サクラ
会」『移民研究』5: 1-23。
- 今泉裕美子 (1990) 「日本の軍政期南洋群島統
治 (1914-22)」『国際関係学研究 (別
冊)』17: 1-18。
- 今泉裕美子 (1992) 「南洋興発 (株) の沖縄県
人政策に関する覚書——導入初期の方針
を中心として」『沖縄文化研究』19: 131-
177。
- 今泉裕美子 (1996) 「南洋庁の公学校教育方針
と教育の実態」『沖縄文化研究』22: 567-
618。
- 今泉裕美子 (2002) 「日本統治下マイクロネシア
への移民研究」『史料編集室紀要』27: 1-
22。
- 井上亮 (2015) 『忘れられた島々——「南洋群
島」の現代史』平凡社。
- 印東道子 (2005) 「ヨーロッパ人との遭遇——
「発見」されたマイクロネシア」印東道子編
『マイクロネシアを知るための 58 章』、
pp. 70-73、明石書店。
- 石上正夫 (1983) 『日本人よ忘るなかれ——南
洋の民と皇国教育』大月書店。
- 河路由佳 (2014) 『中島敦「マリヤン」とモデ
ルのマリア・ギボン』海の人。
- 川村湊 (編) (2002) 『中島敦 父から子への
南洋だより』集英社。
- 小林泉 (2010) 『南の島の日本人——もうひと
つの戦後史』産経新聞出版。
- 須藤健一 (2000) 「マイクロネシア史」山本真鳥
編『オセアニア史』、pp. 314-349、山川
出版社。
- 須藤健一 (2005a) 「スペインからドイツ統治領
へ——ヨーロッパ諸国による統治の歴史」
印東道子編『マイクロネシアを知るための
58 章』、pp. 74-77、明石書店。
- 須藤健一 (2005b) 「日本統治時代——日本の
手に渡った植民地」印東道子編『ミク
ロネシアを知るための 58 章』、pp. 78-81、
明石書店。
- 須藤健一 (2011) 「土方久功が住んだパラオ
——植民地としての歴史」須藤健一・清
水久夫編『土方久功日記 III (国立民族
学博物館調査報告 100)』、pp. 599-620、
国立民族学博物館。
- 寺尾紗穂 (2008) 『評伝 川島芳子——男装の
エトランゼ』文芸春秋。

寺尾紗穂 (2015) 『原発労働者』 講談社。

【資料】

上前淳一郎 (1974) 「30年目の南洋群島」『文芸春秋』12月号、pp.298-322。

(1931) 『日本統治地域 南洋群島解説寫真帖』
研文社。

矢内原忠雄 (1941) 『南洋群島の研究』 岩波書店。